

平成30年度劇場・音楽堂等機能強化推進事業
(地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)

成果報告書

団体名	富士山河口湖音楽祭実行委員会	
施設名	河口湖ステラシアター	
助成対象活動名	公演事業・人材養成事業・普及啓発事業	
内定額 (総額)	18,517	(千円)
公演事業	14,306	(千円)
人材養成事業	3,358	(千円)
普及啓発事業	853	(千円)

(2) 平成30年度実施事業一覧

【公演事業】					
番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	富士山河口湖音楽祭2018 シエナ・ウインドオーケストラコンサート、プレ演奏：フレッシュコンサート	2018年8月19日	出演：宮川彬良（指揮、ピアノ）、シエナ・ウインド・オーケストラ（演奏） ※プレ演奏：音楽祭県中学生特別バンド、中学生特別バンドOB吹奏楽団、特別合唱団、山梨県中高生打楽器特別チーム	目標値	2,000
		河口湖ステラシアター		実績値	1,753
2	富士山河口湖音楽祭2018 海外音楽チーム音楽合宿と演奏促進事業、国際交流コンサート	2018年7月8日他	出演：十興國小学校児童楽団、中正國中学校弦楽団、愛楽楽団、ペーター・シュミードル他	目標値	800
		河口湖ステラシアター他		実績値	1,734
3	富士山河口湖音楽祭2018 吹奏楽活性化プログラム ぱんだウインドオーケストラコンサート、ミニ演奏会等	2018年8月12日	出演：ぱんだウインドオーケストラ、上野耕平他	目標値	2,100
		河口湖ステラシアター		実績値	830
4	富士山河口湖音楽祭2018 吹奏楽活性化プログラム 吹奏楽全国トップチームによるフレンドシップコンサート、吹奏楽交流マーチングパレード演奏会他	2018年8月18日他	出演：埼玉県立伊奈学園総合高校吹奏楽部、東京都立片倉高校吹奏楽部	目標値	1,200
		河口湖ステラシアター他		実績値	3,367
5	富士山河口湖音楽祭2018 オープニングコンサート国内外音楽交流コンサート	2018年8月11日	出演：上野原西中学校、東海大学付属甲府高校、駿台甲府高校、北京市第二十中学 他	目標値	800
		河口湖ステラシアター		実績値	1,180
6	富士山河口湖音楽祭2018 河口湖円形ホール室内楽シリーズ、一流演奏家によるアウトリーチミニ演奏会、併設ワークショップ等	2018年8月12日他	出演：福士恭子、木之下貴子、上野耕平、高橋優介、茂木大輔、N響メンバー、池上英樹、廣瀬史佳、宮川彬良、ダイナマイトしゃかりきサーカス	目標値	480
		河口湖円形ホール		実績値	1,603
平成30年度の目標値、実績値				目標値	7,380
				実績値	10,467

(2) 平成30年度実施事業一覧

【人材養成事業】					
番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	富士山河口湖音楽祭2018 作曲家宮川彬良等による音楽祭アカデミープログラム	平成30年8月17日 他	宮川彬良(指揮、ピアノ)、シエナ・ウインド・オーケストラ(演奏)	目標値	500
		河口湖ステラシアター 他		実績値	536
2	富士山河口湖音楽祭2018 中学生吹奏楽特別バンド編成、特別合唱団編成等	平成30年6月9日～19日	ぱんだウインドオーケストラ(演奏)、上野耕平(サクソフォン)、葉袋貴(バンド指導:山梨交響楽団指揮者)、音楽祭山梨県中学生特別バンド(演奏) 他	目標値	220
		河口湖ステラシアター 他		実績値	255
3	富士山河口湖音楽祭2018 文化ボランティアの活性化と若年層ボランティアの育成	平成30年8月9日～20日	音楽大学アートマネジメント専攻学生滞在育成プログラム	目標値	44
		河口湖ステラシアター 他		実績値	24
4	富士山河口湖音楽祭2018 吹奏楽音楽祭特別編成若手育成アカデミープログラム	平成30年8月16日～18日	シエナ・ウインド・オーケストラサクソフォンセクション(榮村正吾、江川良子、貝沼拓実、大津立史) サクソフォンカルテットジャスミン、公募メンバー	目標値	50
		河口湖ステラシアター 他		実績値	3
平成30年度の目標値、実績値				目標値	814
				実績値	818

(2) 平成30年度実施事業一覧

【普及啓発事業】					
番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	富士山河口湖音楽祭2018 演奏家及び子供達による演奏会及びアウトリーチミニ演奏会	平成30年7月14日他	出演：昭和音楽大学アンサンブル、オマタタツロウ、アラカルト他	目標値	2,000
		河口湖オルゴールの森他		実績値	4,221
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
平成30年度の目標値、実績値				目標値	2,000
				実績値	4,221

【妥当性】

自己評価

社会的役割（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。

富士河口湖町は、1989年から五感文化構想（視覚、聴覚、味覚、臭覚、触覚）を刺激する街づくりをスローガンに、ホール、美術館、ハーブ館など文化観光の拠点施設を設置し各施設が町の生産性を高めるけん引役を担い、施策によって町の人口規模も飛躍的に伸びていった町である。その中核となる聴覚分野を担う河口湖ステラシアターは、3000名収容の野外音楽堂で、1995年の開館当時は完全な野外音楽堂であったものの、2007年に可動屋根を設置し、全天候型野外音楽堂として現在に至る。町直営であることを踏まえて当初から運営に住民の参画を促し、一緒に活動を共にする中で、地域文化ボランティアを中核とした富士山河口湖音楽祭を2002年に佐渡裕さん監修によりスタートいたしました。2018年で音楽祭は17回目を迎え、住民参加型創造音楽祭という形式の中で培ってきた実行委員であり、ホール開設当初からの文化ボランティアも企画立案の重要なポジションもできており、まさに住民と一緒に活動している。当初からのボランティアも90才近くなるが、今でも現役であり実行委員長も担っている。その活動の後ろ姿が、60代、70代の活動における精神的な支柱となっており、やりがいから生きがいになっている。併せて小学高学年と中学生のジュニアボランティアも大人取り組みを見ながら一緒に活動している。国内各地で高齢化が更に進んでいる中で公共ホールの役割は、益々重要な位置付けになっており、むしろ一緒に活動していく仕組みを強化するべきかと思われる。また、音楽祭を開催することにより、全国各地の主要な音楽祭として当音楽祭も取り上げられており、地域の文化ブランド作りにも貢献しており、また、県外から訪れる来場者も多く宿泊促進、音楽祭におけるミニ演奏会開催に伴う来場者の増加、また、周辺レストランなどホールに関わる周辺の施設が、音楽祭開催における大小合わせた50プログラムが有機的に機能し、各所に良い影響が出てきている。

助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。

町の生産性向上に貢献するホール、文化が経済をリードする町づくりに貢献する視点を持ちながら、富士山のエリアターゲットを大きくわけて3つにして俯瞰してみると、中央自動車道、東名高速道路を使って約2時間エリアである首都圏エリア、また首都圏を除くそれ以外のエリア（中京圏、関西圏等）そして海外エリア。いずれも富士山周辺特に富士北麓河口湖が3つのエリアからの訪問客によって観光地としての位置づけがしっかりと構築されている。その中で、着目する視点を2つ持つとして、一つ目は、拠点となるホール（河口湖ステラシアター）が、観光地におけるホールの在り方を実践する場所であること、また、二つ目は拠点施設を中心に、地方に良質なクラシック音楽祭を作ることにより、ソフトコンテンツを目的とした目に見えないイメージアップ及び魅力づくりによって、目的（音楽）を持った滞在の仕組みを構築する。当町は古くから富士山と湖を生かした観光地として栄え、昭和43年の中央自動車道河口湖ICの開通により国内向けの自動車を使っての観光地として変貌したが、平成25年6月の富士山世界文化遺産登録をきっかけに、海外からの旅行者が増えていった。今や河口湖駅はまさに外国に訪れたかのように外国人ばかりである。各国の国際事情から旅行者が変化する可能性も持ちつつ将来の安定した滞在地であることを目標にしつつ、ホールの役割として、音楽団体の合宿の中心地として地域の魅力を感じてもらうため、7月には国際青少年交流音楽祭を計画し、アジア方面のジュニアオーケストラと地元吹奏楽部等の交流事業を行っている。富士急ハイランドなど周辺の施設とも連携しながら、前後にミニ演奏会も実施していることから、結果2、3日河口湖エリアに団体宿泊をしている。日本が平和であり安全であることの認識も構築できるはずであるので、海外の教育予算を日本国内で消費する一部をホールがコーディネートしている。つまり海外からの国際教育の場は日本であるとの位置づけで取り組む姿勢も持っている。そのことで2019年7月は日数を増やして参加団体の増加を図っている。また、この事業は夏の繁忙期から少しづれており、町内の宿泊施設が少しだけ余裕のある時期でもあるので、この事業が隙間を埋めている。併せて、地域の学校訪問を希望してくる学校もあり、自治体の姉妹交流事業よりも、フレキシブルで国際人としての知識を得る機会にもなっている。また、地域に眠る人材を発掘する機能も合わせており、地域の語学ができる方にボランティアで子供同士の交流コーディネートを実施している。この仕組みに賛同していただいている元ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団メンバーも全体共演をするが、ホールがコーディネートしていることもあり、地域別枠で学校ミニ演奏会も行うなど、一人の演奏家が地域に根差して様々なプログラムに関わり、これを担う若手ホールスタッフ及びホールボランティアの育成にもつながっている。

【有効性】

自己評価

目標を達成したか。

ビジョンとして掲げる、(1)町の生産性向上に貢献するホール、文化が経済をリードする町づくりに貢献、(2)人生100年時代、人がすばらしい人生を歩むための文化づくり～ホールが人の心をつむぐ100年構想、(3)幼少期から高齢者までの地域福祉に貢献するホール、社会の交流の窓口としての役割、(4)地域経済活性化に貢献するホール、訪日外国人の滞在における新たな仕組づくりに貢献、(5)ホールが、富士山の新しい文化づくりを育む拠点、音楽と人をつなげる交流に貢献、5つの視点を踏まえてプログラムを構築し、富士山河口湖音楽祭の枠組みで、ホールを拠点に美術館、富士山五合目、レジャー施設など各所で演奏会を開催している。

富士山河口湖音楽祭は、ホール、自治体、学校吹奏楽顧問、一般ボランティアを構成員とする実行委員会が主体となり、それぞれの分野の皆さんの立場や意見などをまとめながら住民参加型創造音楽祭として実施している。その中で、プログラムの回数にもよるが、2018年は大小合わせ50プログラムを実施し、当初180人以上という目標設定に対し、延べ283人のメンバーが、運営文化ボランティアとして音楽祭に関わっていただきました。ボランティアの仕組みも企画立案をする音楽祭実行委員、ホール運営だけ担うステラシアターサポーターズクラブ、音楽祭当日だけの当日運営ボランティア、2018年に枠組みを新たに作ったサポーターズクラブジュニアボランティア、通訳専門のサポーターズクラブ通訳ボランティア、そして、音楽祭にインターンシップとして地元ボランティアとも交流しながらスキルを磨く大学アートマネジメントスタッフと、音楽祭を運営していく中で、ボランティアもいろいろなタイプを持って関わっていただき、基礎的な運営部分を支援していただいている。

また、7月に実施しました音楽祭プレ企画国際青少年交流音楽祭では、2018年で第四回目を迎え参加希望団体が益々増えてきている中で、4団体海外からオーケストラと吹奏楽チームが参加されました。出演者のみならず父兄の参加もあり189名の方が参加しました。2019年の第五回目では海外から参加団体希望が多く、2日間にわたり交流音楽祭を実施する予定であり、今後の参加団体は益々増加傾向となっている。交流音楽祭では、ステラシアターのみの本番ですと滞在も限られることが想定され、地元レジャー施設などでのタイアップ企画としてミニ演奏会を開催すると必然的に滞在が伸びる。7月20日以降は日本の夏休みと重なり、ホテルや音楽祭合宿施設の稼働率が100%ではあるが、その前の若干余裕がある7月上旬に実施することによって、宿泊者の稼働率が増えていくことになり、ホールが地域経済に更に貢献していく仕組みとなっている。

【効率性】

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。
アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

富士山河口湖音楽祭は当初の計画では、2018年7月6日（土）からプレ演奏会を計画し、8月19日（日）に終了する予定で事業計画を立案しました。実質的には演奏家との調整により地元子供たちの共演に伴う本番前日リハーサルを一日前倒しで7月5日（金）に公開リハーサルとして開催しプレ演奏会はスタートしました。その後8月11日（土）にオープニングコンサート、そして8月19日（日）には音楽祭最終日公演として、宮川彬良指揮シエナ・ウインド・オーケストラコンサートを開催し予定どおり音楽祭を閉幕しました。全体のスパンとして約1か月半の期間であるが、実質的には6月から音楽祭中学生特別バンドや音楽祭特別合唱団の練習が始まることとなり、概ね2ヶ月間プログラムを展開しました。この音楽祭の特徴の一つである県内中学生吹奏楽部メンバーによる公募による中学生バンドや特別合唱団プロジェクトは、8月19日（日）の最終公演であるシエナ・ウインド・オーケストラとその前に行われるプレ演奏会に出演の枠組みを作り、このステージで指揮者や演奏家の指導や共演ができることに最終目標が設定されていることから、プロジェクトが約2ヶ月前から練習がスタートし、本番に向けてのモチベーションを構築していくには、ちょうど良い期間設定になっていると思われる。こうした一連の流れが最終日の来場者の集客力につながり、長く告知する仕組みにもなっているため、関わるすべての皆さんの気持ちを総合的にまとめるポイントとなっており、次年度につながる大きな土台になっている。

事業費は一部公演のチケット売り上げの伸びが予定より低いところからのスタートであり、チケット販売開始後に収支バランスを見直しながら進めていった。その危機感から実行委員会始め、ステラシアターサポーターズ等ボランティアの皆さん協力していただく気持ちを深くいただききっかけとなり、その後のチラシダイレクトメール発送や、近隣イベントなどでの営業チラシ配布、また、音楽祭プレ演奏会から始まるミニ演奏会など各会場でのチラシ配布へとつながり、こうした動きと気持ちが熟成されステラシアターでの大規模コンサートへの動員につながった。チケット売り上げは目標には至らない公演もあったが、結果ボランティアの皆さん始め最終日の達成感につながり、かけがえの無い貴重な空気感を作ることができた。この気持ちは翌年度にも必ず良い形で事業が繋がるとと思われる。

【創造性】

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

ビジョンとして掲げる、(1)町の生産性向上に貢献するホール、文化が経済をリードする町づくりに貢献、また、地域経済活性化に貢献するホール、訪日外国人の滞在における新たな仕組づくりに貢献、ホールが、富士山の新しい文化づくりを育む拠点、音楽と人をつなげる交流に貢献、などの視点を踏まえてプログラムを構築し、富士山河口湖音楽祭の枠組みで実践していった。ホールを拠点に美術館、富士山五合目、レジャー施設など各所で演奏会を開催している。2002年の第一回音楽祭から監修として音楽祭を地域住民と一緒に作ってきた指揮者佐渡裕さんが、2015年9月からオーストリア ウィーン・トーンキュンストラ管弦楽団の音楽監督となり、富士山河口湖音楽祭にもいつかはまた戻りステージを一緒にしていくイメージを持ちながら、まずは、2018年度はこれまで培ってきたことを継承しつつ、佐渡裕さん側から推薦していただき、2016年度から音楽祭に関わっていただいた宮川彬良さんに引き続き関わっていただいた。宮川彬良さんには、これまで2回一緒に音楽祭で感じたことをアイデアとして形にし、少しずつ実践していくことを柱に、音楽祭最終日の8月19日（日）に、シエナ・ウインド・オーケストラコンサートを指揮しながらプレ演奏で教育プログラムとして実施している山梨県中学生吹奏楽特別バンドや児童合唱団とのコラボレーション企画を実施していった。宮川さんの場合、自身の作品を課題曲に挙げながら、また一方で楽曲をアレンジする。その枠組みを音楽祭で最大限に活かし、中学生バンドや合唱団など参加公募枠を設定していった。中学生バンドは、山梨県内14校78名が参加し、エリアの全く違う学校からの参加があり、この機会に宮川さんの楽曲に触れながら、相互交流が新しく生まれた。また、合唱団も公募し52名が参加し宮川さんの楽曲に触れながら、宮川さんの希望する児童合唱とのコラボレーションも行う中で、相互の交流がこちらでも新しく生まれた。

【創造性】

自己評価

地域の実演芸術の振興など、地域の文化芸術の発展につながっていた（と認められる）か。

音楽祭開設3年目から特別合唱団を組織しているが、毎年目標を音楽祭最終日のステージにつなげていくため、8月の音楽祭最終日に毎回特別合唱団を解散している。しかし、山梨県内各地から集まるメンバーは、毎年特別合唱団に参加している内に深い交流へとつながり、メンバー相互の交流が「河口湖」を基軸としてまとまってきている要素も見られ、発展的に年間活動を行う合唱団（ステラ合唱団）の編成へとつながってきた。現在では、音楽祭特別合唱団の編成にあたり、募集はホール側実行委員会事務局が行い、練習当日や本番当日の受付や会場準備運営は、ステラ合唱団のメンバーが担っている。2003年音楽祭終了後に、それまで無かった合唱プログラムを地域の柱になるよう佐渡裕さんが提唱し、スタートする時は既存の地域合唱団にそれぞれ声をかけ、合唱団体の集合体で100～150人の合唱プログラムをスタートしていたが、その歳月が15年経る中で培われた今のスタイルは、地域がまちまちで、それぞれに思いを持った個々の合唱メンバーが自らの気持ちで作ったホールの名前を冠する合唱団がプログラムの主体となり個々の集まりで編成している合唱団となり、益々広がっている。一方、各地で高齢化の波が深まっていく中で、高齢者の精神性を育み、そして意欲を湧き立たせる受け皿として、芸術文化はその役割を十分負っており、その一つとして「合唱」があり、ホールがその中核を担う責任を十分全うできるレベルまで来ている。富士山河口湖音楽祭のような地域文化運営ボランティア、学校吹奏楽部先生および地域吹奏楽など中身を担う文化企画ボランティアをまとめた共同プロジェクトで生まれる住民創造参加型音楽祭がまさに地域のいろいろな精神的なニーズの受け皿になり、ネット時代で会話文化が電子化される中で、人の会話をベースとした地域プロジェクトが展開されていることに意義がある。

2013年に山梨県で初めて国民文化祭が行われた。当町が町直営だったこともあり音楽だけで4プログラムを担うことになり、その過程で開催した「吹奏楽」、「合唱」、「ジャズ」プログラムを住民にそれぞれ役割領域を担っていただきながら事業を実施していった。関わりの視点は運営を担う文化ボランティア、そして来場するお客様や出演団体を受け入れるための観光事業として受け入れる側と二つの視点を持ち、一方でプログラムも大きく分けて二つの視点を持ち実施していった。ステラシアターを主体としたホール事業と、周辺観光レジャー施設等を活かしながらミニ演奏会を実施していった。こうして滞在が長くなり、出演者は回数多く演奏できる機会も増えて地域ぐるみで事業を支えて事業を終えた。国民文化祭の性質上1年で終わるため、その仕組みをそっくり残す形で新たに生まれたのが、富士山河口湖音楽祭ブレ企画として7月に行った国際青少年交流音楽祭である。2018年で第4目を迎え、台湾3チーム、香港1チーム、地元山梨県2チームが参加し、ステラシアター公演をはじめとした周辺レジャー施設でのミニ演奏会を行った。国内への訪日來訪者が増加していることに付随して、「青少年の国際的な音楽交流拠点：富士山」として、この事業を通じて海外に日本の魅力として発信していくことに力を入れていく。

【持続性】

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展した（と認められる）か。

富士山河口湖音楽祭を実施する中の主体は、地元地域文化ボランティアの存在であり、ステラシアターで1998年から組織化するステラシアターサポーターズクラブが、ボランティア運営の中核を担っている。メンバーは2018年時点で70名おり、その中の2名が企画立案も行う富士山河口湖音楽祭実行委員会メンバーにもなっている。音楽祭期間中は、運営ボランティアが延べ283名参加しましたが、その中で、2018年は、サポーターズクラブジュニアメンバーを組織化していった。初年度は小学校1年生2名、4年生1、5年生2名、6年生1名、中学生2名合計8名が登録し、大人と一緒にボランティア活動に参加しました。いずれも富士山河口湖音楽祭のみに参加することとし、大人業務と並び背筋を伸ばしてきちんと接客に務めたことが印象深い。富士山河口湖町は周辺の自治体が人口減少に歯止めがかからない中で、町の施策を通じて人口を伸ばしている自治体である。その中核は町五感文化構想と称し、「文化観光」「文化教育」に力を入れてきたことが大きいと思われる。約10年後には人口減少が進んでくると思われるが、その前に町の魅力を育み、年少から地域に関わり愛着を持つことが人口減少抑制につながる一つの要素であると思われる。その中で地域の主要な施設であるコンサートホールに年少時から関わることも非常に重要であると思われる。2018年からジュニアボランティアの養成に入ることにしました。ジュニアメンバーが入ることによって、年配のボランティアの会話も広がり、音楽祭が地域のコミュニケーションを広げる役割も出てきており、地域社会のつながりが希薄になってきている現状の中で、こうした世代を超えた交流が町を活性化させる要素になるはずである。

また、富士山河口湖音楽祭では、海外から演奏家を招き一人の演奏家がいろいろな側面の演奏会を開催している。その一つとして町内小学校児童に生の音楽を聞かせるアウトリーチ公演を実施している。2018年は世界的なオーケストラであるウィーン・フィルハーモニー管弦楽団元ジェネラルマネージャーで、首席クラリネット奏者も務めた「ウィーン・フィルの顔」として有名なペーター・シュミードル氏を招き、7月9日（月）地元小学校でミニ演奏会を実施しました。小学校4年生41名を対象に温かいコンサートが実施されました。この事業は音楽祭が終了した下半期にも海外から3演奏家及びグループにより町内小中学校6か所でミニ演奏会が繰り広げられ、485名の児童生徒が音楽を間近に親しむ機会を作りました。ホールが町直営というメリットを活かし、こうした事業が他の自治体では多くは無く、しかも各学校長の得られやすい状態になっており、地域が一丸となって子供たちの教育プログラムを充実させている。こうした動きが町の文化的な評価を得た中で将来のUターン及び移住により人口維持政策につながっていくと思われる。